



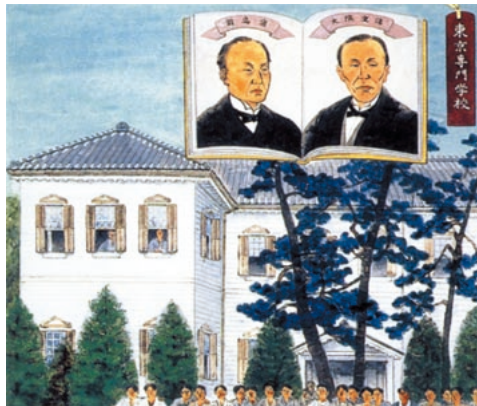
かんぎょう 勸業博覧会の開催

維新後、前島密は静岡藩において開業方物産掛として産業振興に取り組んだ経験を持ち、産業奨励に関心がありました。大久保利通は、前島の主張を取り入れ、勸業博覧会を内務省の所管として明治10(1877)年、東京上野で第一回勸業博覧会を開催し、前島を審査官長に命じました。この博覧会は、わが国の産業発達に大きな影響を与えました。



えき さい かい 日本海員救済会の創立

前島密は、明治13(1880)年、海員の素質の向上とその保護救済などを目的とする日本海員救済会を発足させ、その後も長くその発展に尽力しました。図は明治14(1881)年6月東京南品川心海寺に設けられた海員寄宿所で、海員の寄宿と乗船の仲介を行いました。また、海員養成、無料職業紹介、診療事業を行い、殉難船員の遺族に対する慰藉、海員の養老扶助まで事業を拡大しました。



東京専門学校創立

明治15(1882)年、早稲田大学の前身、東京専門学校が創立されました。この学校は学問の独立を主張する大隈重信の考えで生れたものですが、前島密はその創立に参画してこれを助きました。その後明治20(1887)年に校長に就任し、財政の独立など経営上の困難な問題の解決にあたり、また校長を退いたのちも、長く同校の発展のために尽くしました。

電話の開始

明治23(1890)年12月、東京・横浜市内とその相互間で初めて電話の交換業務が開始されました。電話業務については、明治16(1883)年以来官営にするか民営にするか議論され、前島密は明治21(1888)年逓信大臣榎本武揚の依頼で逓信次官に就任すると、官営に意見を統一し、電話事業を開始しました。



まえ じま ひそか ぎょう せき かい が

前島密業績絵画

せい せん 監修・もり や た だ し
前田青邨 監修・守屋多々志 画



前島密肖像

前島密業績絵画は、前島密没後50年を記念して行われた「近代文化の扉を開いた前島密50年祭記念展」に展示するパネルの原画として制作されました。

この肖像は明治末ころの前島密で、向かって右のえりのバッジが勲二等瑞宝章の略章、同左のえりが当時の貴族院議員記章として描かれています。



けん ぎ 漢字廃止を建議

前島密は、慶応2(1866)年に「漢字御廃止之議」という建議書を将軍徳川慶喜に提出しました。これは、国民の間に学問を広めるためには、難しい漢字の使用をやめるべきだという趣旨のもので、わが国の国語国字問題について言文一致を提言した歴史的な文献です。彼は青年時代、江戸から帰省したとき、みやげの絵草紙と三字経を甥に教えたところ漢字教育の難しさを痛感し、漢字廃止を思い立ったといいます。その後も、国語調査委員としてこの問題に取り組みました。

せん と けん げん 江戸遷都を建言

明治政府は新しい首都をどこにするか検討していました。前島密は、慶応4(1868)年に大久保利通の大坂遷都論を読んで、これに反対し、遷都の地はわが国の中央にあたる江戸でなければならないと大久保に建言しました。この意見は大久保を動かしました。

この年江戸は東京と改められ、9月に天皇は東京へ行幸し、江戸城は皇居となりました。





鉄道敷設の立案

前島密が明治政府に出任して間もない明治3（1870）年、上司の大隈重信から、鉄道の建設費と営業収支の見積りを作るように命じられました。当時わが国には、その標準となるような資料は全くありませんでしたが、彼は苦心の末に精密な計画案を作り上げました。のちにこれを見た外国人はその的確さに敬服したといいます。彼はこの案を「鉄道臆測」と名づけています。品川横浜間に鉄道が仮開業したのは明治5（1872）年5月、新橋横浜間の正式開業は9月でした。



郵便創業

明治4（1871）年3月1日（新暦4月20日）、東京大阪間で官営の郵便事業が開始されました。これは前島密の発議によるものでした。そして彼は、大蔵省や内務省の官僚としての仕事をこなしながら、明治3（1870）年から11年間もの長い間郵政の長として、熱心にこの事業の育成にあたり、その基礎を築きました。そのため「郵便の父」とたたえられています。「郵便」や「郵便切手」などの用語は、彼自身が選択した言葉です。



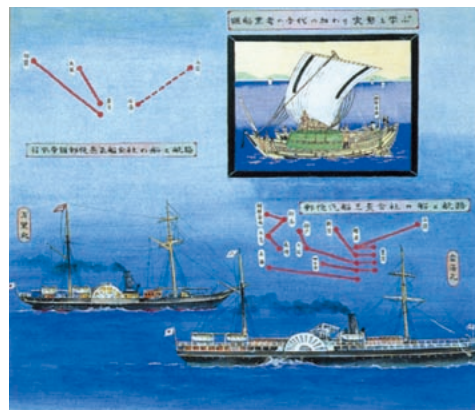
新聞事業の育成

前島密は、欧米社会を見聞して、ひろく世間の出来事を伝える新聞が必要なことを痛感し、その発達を助けるために、明治4（1871）年12月新聞雑誌の低料送達の道を開きました。その翌5（1872）年6月には、自ら出版者を勧誘し、太田金右衛門に郵便報知新聞（のちの報知新聞）を創刊させています。また、明治6（1873）年には記事の収集をたやすくするため新聞の原稿を無料で送れるようにしました。



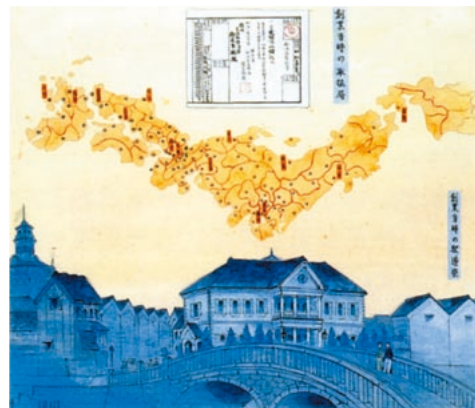
陸運元会社を創立

江戸時代から陸運業務と併せて信書送達を行っていた定飛脚問屋は、郵便事業に強く反対していましたが、前島密の説得を受け入れ、明治5（1872）年6月に日本通運株式会社の前身となる陸運元会社を設立しました。この会社は、全国の宿駅に誕生した陸運会社を統合し、郵便輸送を中核として貨物専門の近代的な通運会社として発展しました。



海運政策の建議

前島密は、海運の大切なことに着眼し、函館では自ら廻送業者の手代に加わって、その実務を体験しました。明治5（1872）年日本帝国蒸気船会社が生れたのも、彼の意図によるものでした。明治8（1875）年大久保利通は、前島密の建言によって、画期的な海運政策を建て、岩崎弥太郎の郵便汽船三菱会社（当時三菱商会）を補助して、その政策を進めることになりました。これが今日の日本郵船株式会社の前身で、近代海運はこのときから始まったといわれています。



郵便為替を開始

明治8（1875）年1月、郵便為替が始められました。前島密は、イギリスでの経験から郵便創業の翌年、経済拡大には郵便為替の実施が必要と建議しましたが、運転資金や取扱者の技術的な問題もあって、その建議は採用になりませんでした。しかし彼の熱意により、郵便におくれることわずか4年で事業が開始されました。



郵便貯金を開始

明治8（1875）年5月、東京横浜の両地で郵便貯金の取り扱いが開始されました。前島密は、イギリスで郵便貯金が国民の生活や国家の発展に大きな役割を果たしているのを見て、わが国でも実施することにしました。しかし当初は、なかなか一般に理解されないもので、彼は私金を出して、それを貯金発端金として預けさせるなど、その奨励に苦心をしました。



訓盲院の創立

明治9（1876）年に視覚障害者の教育をめざす楽善会に入会した前島密は、杉浦譲など同志の人たちとともに私金を出しあい、訓盲院の設立に力を尽くしました。明治12（1879）年に完成した訓盲院は、その後文部省へ移されましたが、彼は引続き同校の役員として、長くその運営発展に力を注ぎました。そのため大正6（1917）年皇后陛下行啓の際、彼はとくに召されて、お言葉を賜っています。訓盲院は現在の筑波大学附属視覚特別支援学校の前身です。